

---

# とある科学の高速移動

タピオカ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある科学の高速移動

### 【Nコード】

N9071P

### 【作者名】

タピオカ

### 【あらすじ】

230万人の人が住まう学園都市。

その八割が学生と言うその街で、イマジンプレイカー 幻想殺しや レールガン 超電磁砲が様々な事件に奔走する中、とある能力者が街を駆ける。

ジャッジメント

風紀委員の腕章を着け学園都市を駆けるその少年、まなへそつや 真辺宗谷はレベル1ながらも、風紀を乱す学園都市の生徒達から強力な能力者として畏怖され、クイックムーブ

高速移動と呼ばれていた。

科学と魔術が交わる時、その少年も駆けていた。

## とある話のプロローグ

「ちょっと！アンタよアンタ！止まりなさいってば！！」

後ろから声をかけられた少年は、自分に声がかけられたのか、と理解して振り返った。

「あー、またかよビリビリ中学生」

「ビリビリ言うな！私には　　ってちゃんとした名前があんのよ！いい加減に覚えなさいよ、アンタ初めて会った時からビリビリ言ってるでしょ？」

人様をアンタ、アンタと呼ぶ年下なんてビリビリで十分だ。

「んな事……………んなあああつ！！？」

少年はため息をつきながら少女の背後に見えた人影を指差し、大声をあげ驚いた。

背後と言っても、その人影は豆くらいしかないほどしかなかった。

つまりはとても遠くの人影だ。

その人影がビルの屋上から屋上へと、まるでバッタのように飛び移っていたのだ。

「なによ？なんもないじゃない」

「馬鹿やろうビリビリーい、今！人をがビルからビルへ飛び移って  
たんだよ！しかもすげえジャンプ力で！」

「そんなの、別に驚くことじゃないわよ。多分知り合いだし」

ビリビリ中学生はビルを見上げながらため息を漏らす。

「っていうか、アンタと同じ学校じゃない。なんでアンタが知らないのよ」

たしかに、自分と良く似た服装だった。

夏場なため半袖になっているシャツ。黒いズボンは通気性が高い夏服仕様だったろう。

「なんだ？お前の知り合いには忍者までいるのかよ超能力者」

「馬鹿、アンタと同じ学校のレベル1よ。風紀委員の後輩ジャッジメントがいて、  
その子の仲間。何度どか会ったことがあるだけ」

「へえそうなのか……ってあれ？風紀委員の奴が隣のクラスにいた  
ような………確か」

真辺宗谷っていったかな？

## とある話のプロローグ（後書き）

これは”とある魔術の禁書目録”のオリジナル二次創作です。

オリジナル能力、原作キャラのオリジナル設定追加など、そういったことに嫌悪感を抱く方にはオススメしません。よかったら《戻る》などしていただくことを強くオススメします。

『いいぜ？名乗ってやんよ』

少年は焦っていた。

ちくしょうちくしょうちくしょう！殺される！

一足で20mを駆け、一飛びでビルを越える驚異的な脚力を持って少年は空を走る。

その表情には、焦り、恐怖が浮かぶ。

「見えた！……間に合え……間に合ええ！」

ある建物を見つけラストスパートをかける。脚に力を込め、バネのようにしならせ跳躍。目指すはその建物の窓ガラス。幸運なことにその窓ガラスは開かれていた。

「グウレイトオ！」

勢いよく窓から建物の中に飛び込むと同時に、まるで図ったように置いてあった椅子（足に小さなローラーが付き、360度椅子が回転するあの椅子）に座る。

着席と同時に、座った衝撃で椅子が勢いよく走り出す。座席がくるくると回転しながら。

そして、カラカラと音を立てながら走っていた椅子が突然、ピタリ、と止まった。

「何が……グレイトなの？ソウちゃん」

椅子が止まった時その目の前に立つ少女がいた。

「ひ、姫、これには訳がっ」

少女が腕を上げると共に少年の身体が椅子ごと持ち上がる。

「訳？……」

「そ、そうなんだよ！実はさ、五・六人のヤンキーに絡まれてさ」

「絡まれて？」

「ボコつて来た」

「ダメでしょー！！」

「ぐええ！？」

空中に浮かんでいた少年が突然逆さまになり、そのまま床に激突。頭に大ダメージだ。

「いつもいつもケンカばかりして！風紀委員が進んで風紀を乱してどうするのー！」  
ジャッジメント

姫と呼ばれた少女は、腰に手をあて、床に這いつくばる少年を睨む。しかし、童顔故あんまり怖くない。

「仕方ないだろうが！絡まれちまったんだからよ。にしても能力者でもないのによく懲りずに絡んでくるよなあいつら。その執念深さに脱帽だぜ　　ってぐおっ!?!」

椅子が少年の上に覆い被さり押さえつける。  
凄まじい力で押さえつけられたように少年は動けない。

「今日は黒子ちゃんと初春ちゃんも休みの日だから、ソウちゃんには書類仕事頑張って貰わないとね」  
デスクワーク

近くの机の上に置いてあった書類の塔。ハベルそれが床に押さえ付けられた少年の目の前に振り下ろされた。

「まっ！待ってくれ姫え！俺、外回り行って…」

「ソウちゃん？」

「……頑張らせていただきます」

書類の塔が浮かび上がり少年の頭に乗る。ミシミシと言つ音と共に力がくわえられ少年は降伏した。命は欲しいからな。

ブルルルルルル……ブルルルルルル……

書類の塔を机に戻した時、それは鳴った。

「はい。風紀委員、一七七支部、支部長の殿佐間です。……え？……はい、すぐに向かいます！」

少女は鳴った電話を取り、力強く頷いて電話を戻した。

「ソウちゃん！」

「仕事だな？」

「うん！銀行強盗だって、相手は能力者！人質がいるみたいっ！」

「うしっ……じゃあ行くか！」

「うん！」

少女は手にスケートボードを持ち頷いた。

「行くぜえっ……！」

窓から飛び出した少年と少女。二人は地面に降り立つと同時に走り

出す。一人はその脚で、もう一人はスケートボードに乗り。

ただ二人の走るスピードは一般車道を走る車を軽く凌駕していた。

「くつ……対能力者のスペシャリストはまだなの!？」

アンチスキル警備員の通信が慌ただしく飛び交う中、黒髪を後ろで簡単に留めただけの髪がたの戸谷金透子<sup>とやかねとこ</sup>は、車両の影に隠れながら、手に持った銃器を目の前の銀行へ向け舌打ちをした。当年ピチピチの20歳。アンチスキル警備員になったばかりの新人だ。研修期間が終わり、初の見回り中事件が発生し、駆けつけたのだった。

「オラオラ！人質がどうなってもいいのなあ!？」

パンパン、と乾いた火薬音が鳴る。

銀行強盗が放った拳銃の音だ。空に向け放った銀行強盗は下卑<sup>げひ</sup>た声を上げながら人質の女性の髪を引っ張り喚いていた。

「金と逃走用の車を寄越せつつてんだろうがよお!」

銀行強盗は全部で五人。

その一人一人がレベル3クラスの能力者で迂闊に近づけない。

「くそっ！…先輩達がくるまでまだ時間が…どうすればッ」

透子が二度目の悪態をついた時、事態は好転した。

「あー、犯人に告ぐ。我々は逃走用のワゴンと1週間分の食料。加えて現金千七百万を用意している。今それらを積んだワゴン車がくる予定だ、だから人質に暴力を振るうな」

アンチスキル  
警備員が有する警備車両からメガホンを取りだし、酷く気の抜けた声で喋ってる、黒髪で制服の夏服を着た少年により。

少年？

「なっ！何を言ってるの君は！」

透子は思わず叫んだ。

それを無視し、少年は続ける。

「あー、それとよかつたら人質の交換をしないか？俺らとしては一般人が怪我されるのは忍びない……そうだ、今ここにいる約20名の警備員アンチスキルの中で諸君らの好みの女性を人質に出そう。勿論武装は着けさせない、Yシャツ一枚でさらに手錠プレイも無料で可能だ。どうだ？これだけでも甘美な響きだろう？普段は澄ました警備員アンチスキルが羞恥により顔を赤くする所が見れるんだ、お得だぞー？」

「何を言ってるんだ君はあつつ！！？」

透子は少年に詰め寄った。と言うより取り押さえようとした。

「ジャケット風紀委員です。怪しい者じゃありません」

「言動が十二分に怪しい！それに何故風紀委員ジャケットが！子供には危険だ！早く避難をしろ！」

制服の半袖、その袖口に付けられた腕章を見せた少年は透子の身体を足から顔まで見た後、

「ほら！この人なんてどうだ？黒髪に黒い瞳、典型的な日本人らしいが、その実ボンツキュツボンツ！大和撫子らしからぬ魅力的なボディ！そしてプライド高そうなつり目！ポイント高くないか？」

犯人達に透子を紹介した。

耐えかねた透子や警備員アンチスキルの同僚が取り押さえようとするも、高い脚力で警備車両の上に飛び乗った。

「へへへ、良いぜ？その姉ちゃんと交換だ」

リーダー各の男が、透子を見て舌舐めずりした。

「いやあ、バカでよかった。と、言う事で貴女、Ｙシャツ一枚になつてください」

「出来ないわよそんなこと！降りて来なさい！」

「いやいや、一般人を救うためですし…お、そうだそうだ」

少年はズボンのポケットから携帯電話を取りだし、誰かに電話をかけた。

「どもつす先生。今こっちに向かっていますよね？今犯人の要求を飲んで…：イエス。で、その人と電話代わります。…：はい、お姉さん」

「わっ！…なんなのよ、…えっと…もしもし？…：先輩！？」

投げ渡された携帯電話を受け取り、透子は知った人物の声を聞いた。

カシヤカシヤッ！

「いいよいよよー！もつと笑ってえー」

「って待ちなさいーい！なんで撮ってるんですか！？しかも高そうなカメラで！」

アンチスキル  
警備員の標準装備である装備一式を外し、下着とYシャツ一枚と言  
う恥ずかしい……と言っより、もはや露出レベルの格好になった透  
子は、一眼レフのカメラを構え、連続でシャツターを押しまくる少  
年に叫んだ。

どこから出した、そのカメラ。

「お、ワゴンも来たし…おーい、銀行強盗さーん。ワゴンも来たこ  
とですし、人質交換ですよー」

「き、聞きなさい、人の話を！」

銀行強盗達は、透子の衆人監視の中でのストリップショーと撮影会を楽しみ、人質交換の時を今か今かと待っていた。目は血走り鼻息は荒い。

「あ、そうだそうだ。お姉さん、これくわえてください」

「え？……むくう！？」

突然口に放り込まれたのはマウスピース。ボクサーがくわえてるあれだ。

あれを突然口に入れられ驚いた私に、少年はさらに口をガムテープで封じた。

「作戦を伝える暇がないので略させて貰いますが、必ず助け出すので安心してください」

「むー！むむーっ！（撮ったデータ見てニヤニヤしながら言われて、安心できるわけないでしょう！？）」

「ええ、任せてください……貴女を迎えにいきます（キリッ）」

「（ドキッ……ってなるかあっ！と言うか、ちゃんと私の言葉を理解して返せー！）」

頬を赤くしながら透子は泣きわめく。ガムテープで口を封じられるから呻く、だろつか？。

そんなこんなで無事に人質交換が終わり、透子はワゴン車の中、それも大の男四人（一人は運転）に囲まれいやらしい目と手つきで身体中を弄られて死にたくなっていた。

「（むきー！帰ったらただじゃおかないんだからあつ！）」

死にたくなっても舌を噛めず、暴れたくても脚と腕を手錠で封じられ暴れられない。

怒りから涙が出てくる。ああ、こんちくしょう………と心の中で呟いて、透子の視線はふと、ワゴン車の窓ガラスへ移った。

（え？………え？）

二度、二度も確かめるように目を瞬いた。

80キロはゆうに越すであろう

ガンッ！ガンッ！ガンッ！ガンッ！

走行するワゴン車に衝撃が走る。

「なっ、なんだ……！？」

ワゴン車に乗り込んでいた男達は突然の事についていけず、叫んだ。

「ひいっ！？」

運転席にてワゴン車を操る男が悲鳴をあげる。

なんだなんだ？と男達が車の外を見たとき、

目があった。

「囚われの姫（人身御供）を返して貰いに來たぜ！！」

黒髪を靡かせ、現れたのは先程、戸谷金透子を生け贄に捧げた少年だった。

少年が叫ぶのと同時に、ワゴン車に衝撃が走る。少年がワゴン車に向けタックルを仕掛けているのだ。衝撃で車体が揺れる。

（アンタが差し出したんでしょうがー！！）

透子は揺れる車内で涙を流した。こっ、タパー、と。

「ち、ちくしょうー！」

運転をしていた男がハンドルを左に切る。少年がワゴン車と並走する反対側だ。

そして曲がった先は、車一台が通れるくらいの狭い路地裏。

「へ、へへ…これで…ん？」

車と同等の速度で走る少年を振り切った運転主の男は、視界の先…

……路地裏の出口に立つ一人の少女を見た。

肩までかかるくらいの黒髪を靡かせ、少女は腕を振り上げる。

すると、道の幅にぴったりとはまるくらいの車体のトラックが少女とワゴン車を遮るように『縦に落ちて来た』。

キキキーーーーッ！！

ガシャーンッ！！

ブレーキをしたところで間に合わず、トラックとワゴン車は激突した。

「ぐっ、ざケやがって……」

衝撃したワゴン車から、男達が警戒した様子で飛び出して来た。

「さつて、ここなら一般人を巻き込む心配はねえな。オラ三流能力者ども、せいぜい足掻けよ?」

先程、ワゴン車と並走していた少年がコツコツと靴音を鳴らして逃げ道を失った銀行強盗達に向かい歩いて行く。

「く、来るんじゃないっ!…この女がどうなってもいいのかよ!」

戸谷金透子をワゴン車から引きずり落とした男が、透子のこめかみに銃口を突きつけ叫ぶ。

その目には、自分の能力を虚仮にされた怒りと、逃げられない、と言う恐怖。

「……試しに俺に撃ってみろよ。死姦が趣味なわけじゃねえだろ? じゃまな野郎さえ消せば逃げれるんだからさ」

少年は口元をニンマリと吊り上げて笑った。

「じょーとーじゃねえかつ、死ねよクソガキ!」

「むー!むむーっ!!(ちよ、ちよっと!?!やめなさい!!)」

パンッ。

乾いた火薬音が響く。

男が手にした拳銃から放たれた弾丸。ソレは真っ直ぐ飛び、

「無駄無駄無駄アッ！！……ってね」

少年の人指し指と中指で止められた。

パンパンパンパンパンッ！！

決して腰を振ってるわけではございません。全て火薬音です。

「よ、よるんじゃねえー！！」

「よっ、はっ、っつ」

男が乱発する弾丸を少年はまるで投げられたボールを掴むような気軽さで、その手で受け止めて行く。

(この子…凄い……………！)

透子は、無理矢理下ろされて擦れた太股の痛みも忘れ、マンガの世界でしかお目にかかれないであろう「弾丸止め」を見せられ目を輝かせて興奮した。

「馬鹿どもがッ！何拳銃構えてんだよッ。ろくに訓練も受けてねえテメエらの銃なんぞ、受けてくれんのは俺かガキだけだつてわかんねえのか！？…………… テメエらはなんだア？……………能力者だろうがよオッ！！虚仮にされてぶちギレてる余裕があんなら、ンなまん棄てて能力使いやがれエッ！！！」

自分に撃つてみると言っておいての言葉である。

男達にとってはただの暴言であるが、その場にながら第三者のような立場にいた透子だけがその真意に気づいた。

(彼は…私に危害を与えさせないよう……………?)

思えば口のマウスピースもワゴン車が衝突した際に役だった。

彼は一般人の被害を無くすため、路地裏と言うこの空間に彼らを導

いた。

その時、ワゴン車が激突する事を予知……いや、計算していたからこそマウスピースを付けさせた。

ガムテープをつけたのは私がマウスピースを吐き出さないようにするためと、銀行強盗達にマウスピースを抜き取られないようにするため……

そして拳銃を自分に向け発砲させたのは私から拳銃を逸らさせるため。

そう考えると、彼の行動にも合点がいった。

私をYシャツ一枚と言う姿にしたのは、銀行強盗達の劣情を誘い、人質の女性と交換しやすかさせるため。

そうすれば、最悪の場合でも一般人には被害が出ない。

一歩間違えれば危なかった我が身を思い、透子は身震いした。それと同時に、

（貴女を……迎えに行きます…か。なんだか私、お姫様みたい、かな？）

脳内補正でイケメンボイスと化した、迎えに行くと言った少年の顔を思い出した。

人質だというのに余裕綽々である。

「ちっ！…ガキがア…キレさせやがって…死ねってんだよオツ！」

少年の挑発を受けたリーダー格の男が、掌に炎を出し、それを投げつけた。

ポウツ！！

空気が烧ける音がする。投げつけた炎は一瞬で膨れ上がり少年を包んだ。

「へへ、やったぜ。この距離で食らえばひとたまりもねえ…」

しかし、少年が先程までいた場所には何もなかった。……そう、焼けたであろう少年の死体も。

「死亡フラグ乙っおあつ!!」

そしてリーダー格の男は視界を消された。

上から落下してきた少年の両足に、顔を踏み台にされて。

「ひでぶ!?!」

「次はテメエだ!」

踏み台にした男から飛び上がると、懐に手を突っ込んだ近くの人に  
しなるような脚で蹴りを放つ。

トタンツ、と着地音がすれば拳を振り上げて殴りかかってきた男を  
脚払い。面白いように転んだ男の頭を踏みつけ、残りの二人を睨み  
付けた。

この間約一秒。

「クソツ!!」

両手を広げた男がシンバルを叩くように手と手をぶつけた。

バシィンツ!!

空気が弾ける音と共に衝撃波が少年を襲う。

が、これを少年は、壁を『蹴り上がり』避けた。

「なっ!?!……ぶっ!!」

「反応が遅えっ!」

壁を蹴り上がった少年は、衝撃波を起こした男の後ろに降り立ち、後頭部を蹴り払い意識を掠めとる。

「ヒッ、ヒッ!」

「うるせえッ!」

一閃。

一瞬、とも言つことを躊躇うほどの刹那に、少年は五人もの能力者達を鎮圧せしめた。

「たアく、能力者だからって聞いて、喜んでたのによ。中身は戦いなれてねえクズじゃねえかッ!」

少年は透子の方に歩き寄りながら愚痴を溢す。

「お疲れさまソウちゃん。怪我はない？」

すると、トラックで閉ざされた後方から声がした。

黒髪を肩に掛かるくらいまで伸ばしたブレザー姿の少女。その少女が『縦』に置かれたトラックの頂上に立っていた。

彼女の手から五つの手錠が浮かび上がり、倒れている強盗達の腕を捕らえていく。

「あるわけねえだろ。お前のおかげで弾丸は止まるし、もとより俺が口々に戦闘経験のない野郎相手に怪我？……ないない」

「ぐ……」

手錠をつけられ拘束されたリーダー格の男が起き上がり、怨めしそうに少年と少女を見上げた。

「残念だったな、おい。レベル3相当の能力をもつくせに犯罪に能力なんか使つちまってよ。もつたいないぜ」

「うるせえ！……お前みたいは大能力者にやわからねえだろうよ！」

「……ハッ、馬鹿かテメエ。自分を打ち倒す、イコール自分より上の能力レベル、何ておもってんじゃねえよ。ま、姫は確かにレベル4の大能力者なんだがよ」

少年は頭をボリボリと掻きながらリーダー格の男を一瞥し、透子のガムテープを剥がし、マウスピースを口から出させてそれを丁寧にビニール袋にし舞い込み大切そうに胸ポケットに入れた。

「あ？……じゃ、じゃあお前の……レベルは！？」

男は信じられないとばかりに目を見開き、声を上げる。

「んあ？……俺か？……いいぜ、名乗ってやんよ」

ニヤリと笑い、少年は透子を抱き上げて言った。

「俺の名は真<sup>ま</sup>辺<sup>な</sup>宗<sup>そう</sup>谷<sup>や</sup>。風<sup>フ</sup>紀<sup>キ</sup>委<sup>ウ</sup>員<sup>イ</sup>1<sup>イチ</sup>7<sup>ナナ</sup>7<sup>ナナ</sup>支<sup>シ</sup>部<sup>ブ</sup>所<sup>所</sup>属<sup>ジュ</sup>、レ<sup>レ</sup>ベ<sup>ベ</sup>ル<sup>ル</sup>『1』<sup>イチ</sup>発<sup>ハツ</sup>電<sup>デン</sup>  
ト<sup>ト</sup>ロ<sup>ロ</sup>ム<sup>ム</sup>ス<sup>ス</sup>タ<sup>ター</sup>ー  
能<sup>ネ</sup>力<sup>リキ</sup>者<sup>シャ</sup>」

「街角の不良連中は俺をクイック・ムーブ高速移動と呼んでるぜ？」

抱き上げた透子を抱え、少年は男に背を向け歩き出した。

『いいぜ？名乗ってやんよ』（後書き）

ようやく二話目を投稿。

この話は『とある科学の』と名づつてますが、御坂美琴ゴウゼキミコはあまり出てきません。申し訳ありませんでした。

『イライラするなあ……っ』

「……………」

「……………ソウちゃん？ごめんなさいは？」

「下着にYシャツの恥ずかしい姿を写真に納めてごめんなさい」

「何に使おうとしたの？」

「……………夜の……お供に」

ガッツ！

「いてっ」

「えっちっ！」

どこから飛来した看板が宗谷の頭に降り掛かった。

「で？銀行強盗の奴らは？」

「先生に引き渡しておいたよ？そんな事より」

「わーってるよ！ほら、これ追加！」

えー、今わたくしめは今、一七七支部にてデスクワークをしております。ネガを没収された俺はその場です巻きにされ一七七支部へ連行され、この苦行を強制されております。あゝ、身体動かしてえ。

あ、紹介が遅れました。俺、真辺宗谷まなへそごやって言います。

風紀委員としてはもう七年になる大ベテランなのです。素手喧嘩すてころ

大好きな高校一年生です。

「むっ、字が汚いよ？」

そしてこいつは俺の幼馴染みの殿佐間茜とのさまあかね。気づいているだろうが『念動力』レベル4の大能力者だ。

俺が初めて茜とあった時、名前をバカにしたら泣きわめきながら切れて、泣き止まずのに、謝りながら姫様とか呼んだら機嫌を良くしたのでそれからずっと姫と呼んでる。

「うっせー！俺にデスクワークを求めんなっつもの！」

ちなみに貧乳だ。言ったらマジで殺されるがな（笑）

「走ったりキックしたりしか出来ないならそれは風紀委員じゃないよ？」

「鉄拳制裁だ」

「バカっ」

ぽこ、と念力で浮かべた紙束で俺を叩く姫。

「バカじゃねえさ。拳でしかわからねえ奴もいるんだよ」

それを手に取り、またペンでガリガリと文字を書いていく。あー、ほんっとデスクワークって嫌いだ。俺の性分はさっき姫も言ったように、走り回って殴り蹴りして問題解決だしな。直接攻撃系の能力者なら素手喧嘩に持ち込みや楽に勝てるし。

「もー、いつも頭の中はケンカ、ケンカケンカだもん。ソウちゃん風紀委員に向いてないんじゃない？」

「ちげえねえ！」

ゲラゲラと笑う俺に姫は呆れたように溜め息をついた。

「取り合えず、それで終わりだから頑張ってね？」

「おうよ！にしてもこんな量だったか？さっきの書類パベルの塔はもっと多かつたはずだが…」

「私も手伝ってるもの。ほら、早くしないと完全下校時刻過ぎちゃうよ？。急いで終わらせて帰らないと！」

「別に俺は今すぐ帰っても構わないんだが？」

「バカ！」

今度は分厚い本で叩かれた。広辞苑ってお前：流石にいてえわ！。

「お、クレープか。うまそ〜だな」

「学校帰りの買い食いはダメだよ！」

「いいじゃねえかよこれくらい。一個奢ってやつからよ」

完全下校時刻前に書類整理を終わらせ、俺と姫が帰る途中に露店を見つけたのだ。

「え？……ほ、ほんとに？」

「ほんとにもほんと、手伝ってくれたしな」

姫は甘いモノに目がない。その証拠に、先程までは買い食いを否定した姫は既に目を輝かせクレープ屋のメニューに目を向けていたのだ。

「……………いちごがいい！」

「おう。おばちゃん、イチゴとミックスチョコ一つずつ頂戴！」

こう言った屋台の売上ピークは完全下校時間前、まだ余裕のある時間帯だ。

こんなギリギリの時間で買いにくる生徒は少ない。俺と姫は並ばずに購入できた。

二分もすれば売店のおばちゃんが「はいよ」とクレープを二つ差し出して来た。

「はむ、……………チョコがなかなか…これは旨い」

「いちごとクリームのは組み合わせは最高だよ！おいしーよ！」

それと、姫に甘いモノを与えると、子供っぽくなるのだ。

「……………でよ姫、最近おかしくねえか？」

「ふえ？」

「鼻にクリーム付いてんぞ。……いやよ？最近、やけにレベル3クラスのやつらが暴れてないか？」

そう、夏休みが間近に迫った今、何故か能力者の争い事が増えている。

例を挙げれば先の銀行強盗や、有能力者による無能力者狩りなどと言った大きな事件が多発してるのだ。

「……確かに、ここ最近は毎日事件があるし、その殆どが……」

「レベル2、またはレベル3の能力者達ばかりだ。偶然にしちゃ出来すぎてないか？」

「組織的な動きがある、って言うこと？」

「にしちゃあお粗末な事件ばかりだ。ただ暴れてるだけだし、かし何かある、かもしれんってな」

「……固法<sup>この</sup>ちゃんにも聞いてみる？」

「まだ事件かどうかはわからん。憶測の域を出んからな、白井に知られて、刺激してまた勝手な行動を取られるのも困りもんだ」

「黒子ちゃん、行動力あるからね」

俺の話は終わりとばかりにクレープを一口食べた俺に続き、姫もクレープを一口食べた。

「おにさまあ〜っ！」

突如、二人の進行方向から金髪のツインテールな女の子が掛けよつて来た。

「おお、エリカじゃんか。どうした？」

「どうした？などとっ……わたくし、ずっとお兄様を待ってましたのよ？」

宗谷の言葉に心外のばかりに、エリカと呼ばれた少女は目に涙を浮かべる。

ふと辺りを見ると、もう常盤台中学のすぐ近くまで来ていたらしい。

「悪い悪い。書類整理に手間取ってな」

「仕事を溜めるからいけないんだよ？」

「わっバカ！言うなって！」

二人のやり取りにエリカは口元を押さえクスクスと笑った。

「さ、お兄様。早く帰ってご飯にしましょう」

「ん、そうだな。じゃあな、姫。また明日」

「うん。じゃあねソウちゃん！エリカちゃん！」

「はい、さようなら」

常盤台の校門前で茜は手を振りながら、青くなった信号を確認し反対車線へ走っていった。

『完全下校時刻が近づいてきました。学生は速やかに下校してください。繰り返します完全下校時刻が……』

ピンポン、と気の抜けるような音とともに、どこか無機質なアナウンスが流れる。

「しまった、このままじゃ家までに先公に捕まっちゃうな」

「走れば間に合いそうですが……」

「跳んだ方が速いな。エリカ、行くぞ！」

「はっ、はい！」

顔を赤くするエリカを抱き上げ、宗谷は駆け出した。

走る、走る走る走る走る

！

まるでギアを変えるように徐々に速さを上げ、車さえ追い越す速度になった時、宗谷は跳んだ。

世界が一変する。

先程まで地から延びるように建っていたビル郡が軒並み視界の下に見えるという衝撃。

エリカと宗谷の視界を遮るのは何も無い。夕陽の光に照らされ、オレンジ色に染まった空を二人は跳んでいた。

ああ、ずるい。

とっつても狡いとエリカは心の中で義理の兄に愚痴を漏らした。いつも待っていると知ってるだろうに、兄は一時間以上も校門前で

自分を待たせたのだ。  
罰として今夜のカレーのお肉を無しにしよあかとも考えたのだが…  
…やめにした。  
自分を抱きかかえ走り跳ぶ兄の横顔が、とてもカッコ良かったから  
だ。

ああ、ずるい。

「お兄様」

「ん？どしたエリカ」

ビルの屋上を駆け、また飛び上がった宗谷にエリカは笑みを見せる。

「いつもご苦労様です」

「ん、まあな！」

ニツ、と笑った兄は、少しだけ走る速さを上げた気がした。

ああ、いらいらする。

妬み、妬み妬み妬み妬み妬み。

ああ、いらいらする。

「ギャハハハハッ！」

ふと、下卑た笑い声が聞こえ、またいらいらが募る。

リュックサックからバナナを取りだし、皮ごと咀嚼。

ああ、クソ、皮ごと食べちゃったよ。いらいらする。

ああ、いらいらする。あの男、可愛い女の子を二人もつれて……  
人を抱きかかえて跳んでいったあの男……

「イライラするなあ……………ッ」

このイライラは誰にぶつけようか。  
取り合えず、バカみたいな笑い方をすることいつらを殺ろうかな。

『イラストするなあ……っ』（後書き）

大変長らくお待たせ………待ってくれる方がいるかは不安ですが取り合えず投稿！

基本的な設定はアニメ基準です。しかし、二次創作故に一部の原作（小説、アニメなどの公式）キャラが主人に恋したりします。

あ、かみやんを好いてるキャラには手出しはしませんよ

ではでは次回、いつになるかわかりませんが（笑）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9071p/>

---

とある科学の高速移動

2011年10月11日11時56分発行